

令和２年度 徳島県立博物館・徳島県立鳥居龍蔵記念博物館協議会

【日時】

令和２年９月３０日（水）午前１０時から午前１１時３０分まで

【場所】

徳島県立博物館 講座室

【出席委員】（５０音順、敬称略）

安倍 久恵（フリーアナウンサー）〈副会長〉

大栗 美菜（徳島市立考古資料館学芸員）

角元 良（八万小学校ＰＴＡ会長）

川真田早苗（元文部科学省学習指導要領改善検討指導・助言委員（北陸学院大学教授））

河野まゆ子（ＪＴＢ総合研究所地域戦略部長・主席研究員）

塩瀬 隆之（京都大学総合博物館准教授）※オンライン参加

原 多賀子（京都外国語大学非常勤講師）

町田 哲（鳴門教育大学大学院学校教育研究科准教授）〈会長〉

松村 幸恵（阿波市国際交流協会会長）

- １ 開会
- ２ 館長挨拶
- ３ 委員紹介
- ４ 議事

- （１）令和元年度事業実施状況について
- （２）令和２年度予算及び事業概要について

（１）令和元年度事業実施状況について 質疑応答

委 員	館長挨拶にあったが、新型コロナウイルス感染症の影響により、８月における徳島県文化の森総合公園の来館者数は６割にとどまっている（前年度同月比）とのことである。どの層が減ったのか。学生が減った、あるいは高齢者が減ったなど、より詳細な事が分かるか。
事務局	詳細については現在分析中であるが、とくに鳥居龍蔵記念博物館でいえば、常設展は６７％の減少となっている。もともと鳥居龍蔵記念博物館は高齢者の来館が多いという特徴があり、新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けている。また、学校教育における遠足利用が

	上半期はほぼ無く、その影響もかなり大きく出ている。
委 員	まず、令和元年10～12月に開催された部門展示「大嘗祭と阿波」に関連して、今回の部門展示ではじめて三木家文書（徳島県指定文化財）が公開されたが、今後も文化財のさらなる公開をしてもらいたい。公開することで、地域に伝わる歴史を知ることになり、また地域の誇りにもつながっていくと思う。 次に、令和元年7～9月の企画展「とくしまの恐竜時代―徳島県の恐竜化石発掘調査報告―」に関連して、恐竜化石が多く含まれるとされるボーンベッドの発掘に注目が集まっている。地層からはカメなど、こどもたちにとって身近な化石の発掘もあると聞く。恐竜から進化して今につながる生物がいることを知れば、こどもたちの創造はさらにふくらむと思う。また、令和元年度に行われた恐竜発掘のクラウドファンディングの際に、ドローンを用いた発掘時の映像を一部見たが、大変よくできていると感じた。一般人は発掘現場には行くことができないため、引き続き調査中の映像を見ることができれば良いと思う。企画展の観覧者数は18,710人と多く、あらためて恐竜人気を確認することになった。 特別陳列「板東俘虜収容所」の世界展」では、ガリ版刷り体験の行事があったようだが、このような参加体験型の行事やタッチングコーナーなど、現在はコロナ禍ではあるが、五感に訴えるような機会が多くなると良いと思う。 最後に、普及教育に関して、令和元年度には博物館と脇町高校でテレビ会議による出前授業があったと年報に記載されている。本来は実物資料を見てもらうのが最善だが、これからもテレビ会議やウェブ会議などを使って、児童・生徒に実物資料を見てもらうことで、感動を与えていてもらいたい。
事務局	文化財の公開については、委員のご発言にあった展示以外にも、令和元年度末に特別陳列「八杵神社所蔵 重要文化財 二品家政所下文―地域で守り伝えた文化財―」を開催した。所蔵者から資料をお預かりする機会があり、年度当初は予定になかったが、臨時で公開することができた。今後も公開の機会を捉えていきたい。
委 員	特別陳列「八杵神社所蔵 重要文化財 二品家政所下文―地域で守り伝えた文化財―」は10日間という短い展示だったが、古文書とともに資料を虫干ししながら伝えてきた地域の人たちについても紹介されていた。モノ（資料）とそれに関わる人の営みがあわせて展示されており、良かったと思う。令和2年度の企画展「甲虫すごいぜ！」でも紹介されていたように、展示にいたるプロセスが意識的に取り上げら

	れており、来館者の関心を集めていたと思う。
委 員	博物館を中心に、恐竜化石の発掘調査は今後も行われると思うが、発掘中の様子をどのように記録しているのか。
事務局	令和元年度は、学芸員が撮影機材を発掘現場に持っていき撮影した。令和2年度は、新常設展などの展示に使うことができるよう、撮影のプロに依頼するつもりである。
委 員	恐竜化石の発掘を一般の人にわかりやすく伝えるために、映像を長く編集したものと短く編集したものの2つがあった方が良いと考える。その際に必要なのは、同じ場所で定点撮影し続けることが1点、もう1点はミクロの観点であり、具体的な作業がわかるように撮影すること、両方の要素を記録しつつ、最終的にどのように映像を編集し使用するかをイメージしながら、記録すべきだと思う。素人が撮影する部分とプロに依頼する部分とを分けて、計画的に進めてもらいたい。
委 員	恐竜化石の発掘が終了したときに、ぜひ現場を見に行きたいと思うが、一般人やこどもたちが現場を見に行くことはできるのか。
事務局	現在のところ、発掘現場を公開すると盗掘の危険性があるため、非公開にしている。調査が終了すれば、公開することになると思う。

(2) 令和2年度予算及び事業概要について 質疑応答

委 員	令和2年度は鳥居龍蔵記念博物館が開館10周年で、鳥居龍蔵の生誕150年でもあり、様々な事業が予定されている。そのなかでも鳥居龍蔵に関する論文集を刊行すると聞いている。この10年の研究成果を全国の研究者に発信していくことは、大きな成果だと思う。その上で聞きたいのは、資料整理についてである。この間、鳥居の資料はどのくらい整理が進んでいるのか。海外の研究者も鳥居龍蔵が収集した資料について関心を寄せている。そのためにも調査研究の基礎である資料整理は大切だと思う。
事務局	資料整理については、博物館が鳴門市に所在した時代から進められており、徳島県文化の森総合公園に移転されてからは、従来の事業を引き継ぐかたちで取り組んでいる。資料点数はおよそ7万点である。専任職員が日々資料整理にあたっているほか、月2回ほど、シルバー大学校などを修了された方や当館の旧職員がボランティアで整理作業を

	進めている。資料整理と同時に公開もしており、企画展や常設展トピックコーナーでは、整理が終わったものの中から随時公開している。それらを含めたデータベースの公開が大きな課題である。データベースの枠組みができつつあるのが現状だ。資料の公開に関連して、徳島県文化の森総合公園全体のデジタルアーカイブにおいて、鳥居龍蔵記念博物館では鳥居の自筆ノートなど20点余りを、今春公開した。特に鳥居の記録類は研究者の関心を集めており、今後より一層活用が図られていくと考えられる。撮影は令和2年度も行っており、来春にはさらに公開資料が増える予定である。
委 員	資料の全面公開にむけて、より一層頑張ってもらいたい。
委 員	予算について質問したい。新型コロナウイルス感染症の拡大防止にともない休館する場合があるが、休館中であっても温湿度を保つための予算は必要であり、そのような経費は開館・休館に関係なく、予算化が必要である。それらと関わって、予算や支出などで気をつけている点、また昨年度と今年度で変化した点などがあれば教えてほしい。
事務局	予算については、コロナの影響により一部減額があった。徳島県文化の森総合公園全体では、コロナ対策として空調機の導入やアルコール消毒剤などの大量購入などがあったが、これらは文化庁の補助金で賄ったり、県庁全体の予算の中で対応したりしている。また、監視など、委託業務についての休館に伴う調整については、徳島県立二十一世紀館が主に対応している。
委 員	鳥居龍蔵記念博物館に関して、研究や調査成果をより一層発信してもらいたい。もし資料整理にあたる職員が少ないのであれば、人員を増やすなどの対応も考えられる。
事務局	ご指摘のとおり、職員数は少なく大変厳しい状況だが、一生懸命取り組んでいる。令和2年度は新たな試みとして、鳥居龍蔵の生誕150年を記念して、博物館入口の無料ゾーンにおいてパネル展を行い、普及に努めている。また、鳥居龍蔵記念博物館は毎年のように海外の研究者が調査で来訪してくるのが特徴だ。特に、韓国・中国・台湾などの研究者と情報交換を行い、少しずつではあるがネットワークを広げている。
委 員	鳥居龍蔵記念博物館の企画展について、鳥居はしばしば世界で活躍したと言われるが、出身地である徳島においても大きな足跡を残してい

	たことが、企画展「文化財調査の先覚者 鳥居龍蔵、徳島を探る」で、よく分かった。城山貝塚や三谷遺跡など、鳥居が貴重な発掘調査をしていることを知ることができた。
委 員	徳島から始まる日本の歴史もあると思う。そういった事実をより広く知ってもらいたいと思う。時折、個人の遺留品を扱うことがある。そのような資料をどうすべきか、教えてもらいたい。また近年、日本の古い文献などが海外に流出するケースがある。このような状況が起こっていることも知ってもらいたい。
委 員	現在、文化財の流出が全国的に問題となっている。基本的に、地域に伝わった物は地域で遺すことが重要であり、金銭に代え得るものではない。その際に、博物館が役割を発揮する点もあると思う。その点についてはどうか。
事務局	例えば、大学で行っている博物館関係の授業などにおいて、地域の資料は地域で残すべきである、と伝えている。博物館では、毎年のように県民から戦争関係資料の寄贈を受けている。博物館だけではなく、文書館などとも連携して資料を受け入れることもある。引き続き、多くの資料を受け入れることができるよう図っていきたい。
委 員	個人の遺留品などは、解体業者が持ち込んでくる場合が多い。しかし、お金になりそうにないものは捨てられてしまう。解体業者への意識づけが大切だと思う。
委 員	知り合いの古物商は、博物館と連携をとっている。家を解体したり、終活で持ち物を整理したりするときは、博物館よりも古物商の方に連絡をする場合が多いと聞く。しかし、不慮の事故などでコレクターが亡くなったときなどは、残された家族は資料の価値がわからないため、拡散・流出してしまう場合が多い。そうならないためにも、貴重な資料が博物館に収蔵されるよう、連絡窓口を明示しておくことが重要である。
委 員	この点は難しい問題だ。博物館だけで解決できる事ではなく、より広く連携しながら資料を守っていく必要がある。
委 員	（会場に置かれた新常設展の模型を指しながら）来年夏にこの模型のような展示室ができるのは、今からとても楽しみである。模型を展示・公開する機会はあるか。

事務局	11月に開催する、新常設展プレビュー企画「徳島まるづかみ展」で展示・公開する予定である。もちろん、模型だけではなく、新常設展の見どころなども紹介する予定である。
委員	「徳島まるづかみ展」の県西編と県南編では、展示内容は変わるのか。また、現在ARやVRなどで使う映像などを撮影していると思うが、そういった映像資料も公開していくのか。現在は新型コロナウイルス感染症の影響で、ハンズオン展示は難しいと思うが、それについても教えてほしい。
事務局	新常設展プレビュー企画「徳島まるづかみ展」は県央編・県西編・県南編の3会場で開催し、できるだけ各地域に根差した資料を展示する予定である。よって、同じ資料を展示する巡回展ではなく、資料や展示会場にあわせて内容を変えながら開催する予定である。次にハンズオンについて、現在のコロナ禍では、従来のようにどんどん触れてもらうという運用は、難しいと考えている。今後、どのような方策がとれるのか検討中である。ARやVRなどの映像については、手元の端末機器（スマートフォンなど）で使えるため、新型コロナウイルス感染症の影響は少なく、問題なく実施できるものと思われる。
委員	VRについては、専用のゴーグルを装着する場合、コロナ禍では難しいと思うが、どうか。
事務局	一般的にVRというと、ゴーグルを装着するイメージがあるが、新常設展で予定しているVRは非接触型であり、その点における心配は不要であると考えている。
委員	今夏に開催された企画展「甲虫すごいぜ！」は、内容だけでなくタイトルの付け方も良かったと思う。写真スポットもわかりやすく、大人も子どもも楽しむことができる展示だった。他機関との連携について聞きたい。例えば、企画展の内容に関連する図書を設置するなど、図書館とは連携を図っているのか。また、ミュージアムショップとの連携はあるか。
事務局	展覧会のタイトルはとても大切で、集客にも関わってくる。良いタイトルをつけることができるよう毎回苦心している。他機関との連携については、小規模ながら様々な工夫をしながら行っている。例えば、昨年度は恐竜の展覧会にあわせて、恐竜の切紙ワークショップを図書館と連携して実施した。ミュージアムショップは民間が運営主体であるため、連携は容易ではないが、博物館友の会で新たなグッズを開発

	しており、完成後はミュージアムショップに置いてもらう予定である。
委 員	企画展「甲虫すごいぜ！」はチラシも良く、新鮮味があり好印象を抱いた。
委 員	近年、環境の変化や気象の変化が大きな問題となっている。博物館において、自然環境の変化や10年先（未来）の環境、近い将来発生するといわれる地震などについて、展示などで分かりやすく表現してもらえたら良いと思うが、どうか。
事務局	地震については、以前地震をテーマにした企画展を開催したことがある。環境の変化についてはスケールが大きいため、博物館の展示で表現するのは難しい点もあるが、気候や降水量などについては、新常設展で取り上げる予定である。
委 員	本日の議題は以上である。今回出された意見や提言を、今後の博物館運営において活かしてもらいたい。

以上